

時事フランス語の直接話法

吉 田 廣

SOMMAIRE

Le style direct, en tant que l'un des modes d'évocation des activités linguistiques qu'emploient les journalistes dans les journaux ou les magazines, est une source importante à laquelle ces derniers puisent des effets expressifs ou stylistiques variés. Nous tenterons ici de cerner la problématique du style direct journalistique afin de mettre en lumière ses règles et ses dynamiques de manière aussi concrète que possible. Pour ce faire, nous avons choisi comme corpus une série d'articles de *L'Express* et une autre du *Monde*, chacune ayant pour objet d'évoquer une conférence au sommet — le sommet de Québec en avril 2001 pour l'hebdomadaire et celui de Nice en décembre 2000 pour le quotidien —. Il va sans dire que ce choix a été guidé par le souci d'un minimum nécessaire d'homogénéité permettant d'effectuer éventuellement des comparaisons entre ces deux types de discours journalistique, mais au-delà de leur divergences, l'on assistera à de nombreuses convergences quant à leurs manières d'exploiter à des fins d'information optimale ou d'esthétique stylistique ce lieu de rencontre des voix humaines qu'est le style direct : celle du journaliste, celle du lecteur et celle enfin de divers personnages de la communauté internationale.

Mots-clefs : émetteur-journaliste, récepteur-lecteur, communicant, verbes de communication, contenu communiqué, guillemets.

1. はじめに

ほとんどあらゆる種類の言説は、心理学や物理学のそれという少数の例外が考えられるとしても、人間にかかわる事柄(choses humaines)と人間以外のもの

のにかかわる事柄(choses extra-humaines)の両方に言及する。はたして、小説などの文学的言説、人文・社会分野などの科学的言説、そして、本稿において分析の対象とする新聞や雑誌などの報道的言説は、いずれもがその両方の事柄を喚起する。

ところで、人間にかかわる事柄は、人間の諸活動の性質に基づいて3つのカテゴリーに大別できる。人間の心理状態(états psychologiques)、人間の言語行為(actes linguistiques)、人間の身体行為(actes physiques)の3つがそれぞれである。フランスの時事報道文もまた、これら人間の諸活動の3つのカテゴリーにかかわる言説を展開する場であることはいうまでもないが、本稿では、これらの内の2番目のカテゴリーである「人間の言語行為」に焦点をあてることにしたい。とはいっても、言語行為なるものが心理状態や身体行為と密接に関連するものだということもまた、疑いを容れない事実なのであり、さらにいえば、純粋に言語的な行為などというものは実際には存在しないとまで思われるのであって、この点についての留保を行っておく必要があるだろう。

さて、フランスの紙誌の記者が「人間の言語行為」にどのように言及するのかを解明するという本稿の主目的は、いいかえれば、フランスの報道文において「話法」(style discursif)がどのように取り扱われているかを分析することにはかならない。このような意味において捉えられた「話法」とは、したがって、言表者による人間の言語行為の喚起という広いニュアンスを有するものである。そして、そのような喚起の形態としては、直接的なものや間接的なもの、あるいはまた、網羅的なものや断片的なものなどの種々の形態が考えられるけれども、論点を絞って考察するという観点から、本稿では、網羅的なものも断片的なものも含めて、主としていわゆる「直接話法」のみを分析の俎上にのせることにする¹⁾。

次に、われわれのコーパスについてであるが、フランスの代表的な紙誌である週刊誌 *L'Express* と日刊紙 *Le Monde*²⁾ から、それぞれ1つのサミット関連の記事群をこの論考では取り上げる。そのような選択にあたっては、記事の題材の等質性というファクターを考慮したのはいうまでもないが、やや遺憾なことながら、これらの記事群はまったく同一の題材をめぐるものではない。

L'Express 誌のそれは2001年4月20日(金)~22日(日)にケベック市で開催された南北アメリカ・サミットについてのものだし、*Le Monde* 紙のそれは2000年12月7日(木)~11日(月)にニース市で開催されたヨーロッパ・サミットに関するものである。これは、*L'Express* 誌が毎週木曜日に発行される週刊誌であって、日刊の *Le Monde* 紙との間にタイムラグが存在することに起因するが、はたして、たとえば *L'Express* 誌では、ヨーロッパ・サミットに対して、われわれの資料体となるに十分なだけの紙幅が割かれなかったのである。また、同誌による南北アメリカ・サミットの取り上げ方にしても、実際には、その全体を正面から云々するというよりは、米加両国の関係という視野に立ってカナダ側の観点からそれを眺めるというものである。したがって、厳密な意味での比較対照分析を行うことは、本稿においては望むべくもない。むしろ、ある程度の題材上の等質性を有し、量的にもたがいにバランスのとれた記事群を、1つずつ週刊誌と日刊紙から選び出したうえで、必要なときにそのような制限内で両者を対照的に比較してみるとというのが、この論考でのわれわれのスタンスである。

そういうものとしての本稿のコーパスを、以下に具体的に列挙しておこう(括弧内は、本稿で用いるそれぞれの記事の略号である)。

a) ケベック・サミットに関する2001年4月26日付 *L'Express* 誌(国際版)の pp.26-30の記事群:

- 1) Canada-Etats-Unis : le match inégal (S Q 1)
- 2) Christopher Sands : «Une peur exagérée» (S Q 2)
- 3) Marie Malavoy : «Former un foyer de résistance commun» (S Q 3)
- 4) Pascal Lamy : «Misons sur le multilatéral» (S Q 4; S Q 2~4 はそれぞれ本体記事 S Q 1 に付け加えられたインタビュー記事である)

b) ニース・サミットに関する2000年12月12日付 *Le Monde* 紙の pp. 1-3 および p.21の記事群:

- 1) Europe : accord minimal à Nice (S N 1)
- 2) Le Sommet de Nice, nouvelle étape vers l'Europe des vingt-huit (S N 2; «La parité France-Allemagne est maintenue」と題する至急報を含む)

- 3) Sur les quatre dossiers de la réforme des institutions, les résultats sont très inférieurs aux ambitions affichées (S N 3)
- 4) D'autres mesures pour une Europe plus «citoyenne» (S N 4)
- 5) Tutoiements, altercations, fatigue dans les couloirs... (S N 5; «La France n'était pas à la fête!》と題する至急報を含む)
- 6) Quatre ans pour réfléchir à un projet constitutionnel (S N 6)
- 7) Un petit sommet (S N 7)

2. 発信者

時事報道文における直接話法を素朴かつ図式的に表象するならば、『伝達者 X が伝達内容 Y を述べる [述べるだろう; 述べた]』と、発信者である記者が、受信者である読者に伝えている」というふうに示すことができるだろう。このプロトタイプ(典型)はまた、報道文において直接話法が成立するための、必要にして十分な有りようだと思われる。これをフランス語で表せば、<L'émetteur-journaliste rapporte au récepteur-lecteur: «X dit [dira; a dit] Y.»>となるだろうが、経験的に考えると、このうちの<L'émetteur-journaliste rapporte au récepteur-lecteur: >の部分とギュメについては、直接話法が報道文中に出てくるたびに、それらが明示されるとはいいがたいし、読者によってそれらが鮮明に意識されとも必ずしもいえない。しかし実際には、報道文が世に出るときに、発信者である記者がそこに存在しているということは紛れもない事実なのであり、さらには、記事本体の周辺あるいは途中で、記者の存在がなんらかの形で刻印されているものなのである。とりわけ、フランスで発行される紙誌では、日本の場合と異なって、それぞれの記事に執筆者である記者の氏名が付されることが多い。フランス語報道文における直接話法について論じる第一歩として、その辺りの問題を取り上げることにしよう。受信者である読者にかかわる問題群は、ここで扱うテーマとしては大きすぎるので触れないことにするが、ある意味において、発信者について語るとはそのまま受信者について語ることでもありうる。

ところで、記事のレイアウト・大見出し・リードなどには、記者以外にも紙誌の編集者が関与している可能性が大きい。ことに紙誌上での記事のレイアウトは、むしろ編集者のほうの領分であろうと思われる。また、大見出し・リードなどについても、記者がそれらの執筆をも担当しているとはかぎらず、それらを専門に受けもつ編集スタッフがいる可能性がある。けれども、このような留保を行ったうえで、本稿では便宜的に、記事本体とともにそれらの付随的構成要素も、すべて記者が担当しているとかりに見なすことにする。

記事本体に記者の氏名が付されているか否かにかかわらず、大見出しやリードは、発信者としての記者の存在を誇示するものである。それは単に活字が大きく、したがって、読者に対するインパクトも大きいということだけではなく、言い回しの簡潔性においても明瞭に表れる。つまり、記事本体の内容の総括を前もって簡潔に行っているという点で、記者の考え方がそこに明確に打ち出されるということである。また、あらかじめ記事本体の内容をそのような形で示すことによって、記者が一種の自家引用を行っているとも見なすことができ、そういう意味で大見出しやリードは、それら自体が直接話法の一形態であるといえる（伝達者＝記者自身）。

ここでは、そのような観点から、S Q 1 を具体的事例として取り上げてみることにしよう。まず、S Q 1 の大見出し《Canada-Etats-Unis : le match inégal》であるが、これは実は、S Q 4 の被取材者である P. Lamy の《La zone de libre-échange nord-américaine, un match inégal : c'est d'un côté un éléphant, les Etats-Unis, et de l'autre deux animaux de taille beaucoup plus modeste, le Canada et le Mexique.》という発言をまとめたものにほかならない。なかでも、P. Lamy が用いた《un match inégal》という比喩表現は、不定冠詞を定冠詞に変えることによって強調的ニュアンスが醸し出されている点を除けば、そのままの形が大見出しのなかで使われている。読解のプロセスに沿った言い方をすれば、これは、大見出しで使われていた言葉が実は関連記事のなかに出てくる言葉であることに、読者が数ページ後で遡及的に気づく例だといえる。

同様のことは、この大見出しに続くリードのなかの《l'intégration écono-

mique rogne l'indépendance politique》についてもいえる。この言葉は、今度は当該記事における発信者自身の言葉である《Surtout, l'intégration économique rogne naturellement l'indépendance politique.》を、いくぶん簡潔にしたものである。したがって、ここでは文字どおりに記者による自家引用が行われているわけであり、その点で先の大見出しの例とは相違するが、引用の際に多少の加工が施されている点と、このような形での引用という事実と読者が週及的に気づく点は、大見出しの例とまったく類似している。

さらに、SQ1のなかには付随的構成要素として、ボックス小見出しが1つ設けられている。《“Il est difficile pour une souris de dormir avec un éléphant”》という言葉がそれであるが、これは、当該記事において引用されているP. E. Trudeau³¹の言葉を、引用符つきでそのまま再提示したものである。記事(または記事群)のなかに実際に登場する人物の言を引用しているという点では、先の大見出しの場合と似通っているが、こちらのほうは引用符を用いた完全なセンテンスとなっており、また、なんらの加工も施されずに引用がなされているという相違点がある。さらに、ボックス小見出しの形式が有する特性として、その前後の比較的近いところで同様の文言が現れるはずだということが、読者によって明瞭に意識される。つまり、こちらの場合は、引用が読者によって週及的に気づかれる大見出しやリードの場合と異なって、引用と記事本体との字句上の相互関連性を、記者があらかじめ読者に明示しているケースだという特徴がある。

読者によって週及的に気づかれるか、あらかじめ明瞭に意識されるかといった差異はあるものの、記事の付随的構成要素が記事本体の内容を予告的に提示するという点では、以上の3つの例はたがいに共通している。このような仕掛けから生じる文体効果とは、どのようなものであろうか。おおまかにいって、それは記事(群)全体のオブジェ性を高める効果だと考えられる。字句がこうしたやり方で呼応しあうということは、記事(群)としてのまとまりを醸成し、一種の自己完結性をそれに付与する。たとえば、詩文で脚韻が踏まれると、音の響きあいというまとまりが創出され、文芸作品としての自己完結性が生まれてくるが、報道記事における本体と付随的要素との関係もそれとよく似ている。

そして、対象にまとまりや自己完結性が認められれば、受容する者はそれをオブジェとして眺めることになるはずである。すなわち、一般の言説は情報伝達機能をはたしおえてしまえば、もはや文章としての存在理由が消散してしまうけれども、それとは対蹠的に、多少なりともオブジェ性を具えた言説は、そのぶんだけ文章自体が情報伝達の後も読者の脳裡に永続的に残るということである。発信者は、このようにして自らの存在を記事(群)に刻みこむのだといえる。

さらに、ここで見てきた3つの付随的構成要素は、同一の意味内容を異なる形態の下にいい表すことによって、その意味内容を反復強調しているということも注目に値する。大見出しでは比喩的名詞句が、リードでは引用符なしの直截的節が、ボックス小見出しでは引用符付きの比喩的節がそれぞれ用いられていて、そのかぎりではバリエーション豊かであるが、実質的には同じ意味内容がそれぞれにおいて表出されている。すなわち、「アメリカの力を前にしてカナダは決定的な劣勢に立たされている」ということを、これらの3つの自家引用は繰り返し述べているわけである。このようにして、SQ1の発信者である記者は当該記事の基調を端的に示している。いいかえれば、記者の基本的考え方や心的態度といったものが鮮明に打ち出されている。したがって、そういう意味でもまた、記事本体に付随するこれらの要素は、発信者である記者の存在を際立せ、それを誇示しているといえる。

ここまでは、文体美学的にも意味内容的にも、報道記事の付随的構成要素がいかに関与者の存在を浮き彫りにしているかを見てきたが、この辺りで、記事本体に話頭を転ずることにしよう。

記事やリードの末尾に発信者の氏名がのせられることはよくあるが、記事本体の内部で発信者の氏名が名のられたり、一人称代名詞が用いられたりすることはない。それでも、記事の途中でさまざまな形態の下に、発信者が自分の存在を誇示しているのは往々にして目につくことである。淡々とした事実の記述を、そのような誇示性がゼロ度の言説だとすれば、それとは多かれ少なかれ性質の異なる箇所、つまり、発信者が自分自身の考え方や存在を明らかにしている箇所が、われわれのコーパスの中にも散見される。そして、そのような発信者の態度としては4つのタイプがあるようだ。誇示性の低いものから高いもの

への順序で挙げるなら、それらは、評価的態度(attitude évaluatrice)、文彩的態度(attitude figuratrice)、感情的態度(attitude émotionnelle)、対話的態度(attitude dialogique)の4つである。

これらのうち、誇示性は低いが、最も頻繁に報道文中に表れてくるのは評価的態度である。たとえばS Q 1の冒頭部には、直接話法の伝達動詞にかかわって次のような評価的字句が見受けられる(強調は吉田による；以下も同様)：

- 01) 《Le XIX^e siècle a été le siècle des Etats-Unis, le XX^e siècle sera celui des Canadiens》, prédisait en 1896, **non sans aplomb**, le Premier ministre de l'époque, Wilfrid Laurier.
- 02) En réponse aux manifestants antimondialisation, un salmigondis de professionnels de l'extrême gauche et de simples citoyens armés de bons sentiments, qu'il a qualifiés d'«enfants gâtés», le président mexicain, Vicente Fox, affichait un **bel optimisme** : «Pour la première fois de son histoire, l'Amérique latine a une chance de sortir de la pauvreté.»

前者においては、1896年当時のカナダ首相の発言が「厚かましい」と、後者においては、メキシコ大統領の楽観的発言が「おめでたい」と、記者はやや軽蔑的な評価を下しているが、いささかなりとも論評調の記事にあっては、発信者のこのような評価的態度は、必ずといってよいほど表れるものなのだろう。読者のほうもまた、とりわけ論評記事の多いニュース週刊誌の場合には、文章の端ばして、記者が自分自身の評価をこういうふうにし挟むことを予期しているはずであり、だから一般には、読者によってこうした評価的態度に対して特段の文体効果が認められることはない。

もっとも、評価的態度が独立した1文全体にわたって表出される場合には、一定の文体効果が感得されやすくなることも事実である：

- 03) **Et tant pis pour la fierté nationale!** (S Q 1)
- 04) **Mais il faudra bien aboutir.** (S N 5)

03)では、国内の人工授精センターが精液不足のためにアメリカの精液バンクに援助を求めたことを、いたって平静に受け止めたカナダ国民の心境に、04)では、ニース・サミット最終日の深夜になっても妥協点を見出せないEU諸国

の首脳たちの心境に、記者はそれぞれ自己を同化しつつ、同時に、そうしたカナダ人やそのような首脳たちを揶揄している。他者の心理を評価し代弁しつつ、そこに揶揄的な調子をにじませるこの種の記述法は、古典修辞学でいうところの連合法(association)と通じあうものがある。

記者のこのような文彩的態度をより鮮明に表している例を、S QとS Nからそれぞれ1つずつ挙げることにしよう：

- 05) La signature des traités de libre-échange en 1988 et 1993 (Alena) ont renforcé l'arrimage du canoë canadien au puissant remorqueur américain. (S Q 1)
- 06) Mais il faudra bien aboutir. Le traiteur Lenôtre, qui a assuré l'ensemble des repas du sommet et dont la cuisine est depuis trois jours le seul objet de satisfaction unanime, a fait savoir qu'il ne pourrait plus faire face et les fonctionnaires qui font et refont les textes de la négociation ont des mines de papier mâché. (S N 5)

これら2つの例のいずれにおいても、文彩が二重に用いられている。05)では、arrimage—canoë—remorqueur という寓喩と、canoë canadien および puissant remorqueur américain という直喩とが組み合わせられて、イメージ性の豊かな表現ができあがっており、発信者の文章家としての手腕のほどが読者に伝わってくる。一方、06)では、アイロニーが連続して用いられている。ニース・サミットでの交渉が難航してしているなかで「仕出屋の料理だけが全会一致の満足をえている」というのが、哄笑を引き起こす痛烈な皮肉だとすれば、「交渉文をつくったりつくり直したりしている職員の顔は紙粘土(←かみつぶされた紙)のようだ」というのは、含み笑いを誘うブラック・ユーモア的な皮肉だといえよう。ここでも、記者の文彩上の冴えが遺憾なく発揮されており、そのすぐれた文章家としての側面が誇示されている。

次に発信者の感情的態度が文章中に表出される場合であるが、これは比較的数字が少ないし、また、そこでは中断符や感嘆符などの句読点が必ず用いられる。それだからこそ、とりわけ記者の肉声がじかにわれわれ読者の耳に伝わってくるような印象が生まれ、したがって、記者の人格的存在が明瞭かつ直接的に浮

き彫りになってくる効果が出る。すでに挙げた03)の例においても、感嘆符をとまなう形で、「国民としての誇りはこの際どうでもよい」というカナダ人たちの心性に対する、記者の驚きの感情が表されていたが、中断符および感嘆符を用いた例を、さらにそれぞれ1つずつS Q 1から挙げることにしよう：

- 07) Dans un contentieux récent, à propos de certaines limites imposées par les pouvoirs publics canadiens à la puissante presse magazine américaine, les Etats-Unis menaçaient de réviser à la baisse leurs importations d'acier canadien. **Premières cibles, les aciéries de la circonscription de Sheila Copps, la ministre du Patrimoine, chargée du dossier...** On trouva un compromis favorable aux intérêts américains.
- 08) Même l'«exception culturelle», en principe défendue par les gouvernements d'Ottawa et de Québec, est dans le collimateur de l'industrie américaine. La Columbia vient d'annoncer qu'elle envisageait de doubler désormais ses films en français en une seule version, en France. **Les flics new-yorkais des comédies populaires parleront ainsi, à Montréal, avec l'argot de Paris!** Il n'est pas sûr que le public québécois s'y reconnaisse.

07)では、アメリカ雑誌の輸入に対してカナダ当局が課した制限への報復措置として、アメリカ側がカナダ産鋼鉄の輸入量を削減するという威嚇を行った際に、発端となった問題を担当するカナダ文化大臣の選挙区にある製鋼所がまっ先に槍玉に挙げられたという、アメリカ側の応酬のあけすけなやり方に記者は絶句している。08)では、アメリカの映画会社 Columbia が、自社製作映画のフランス語への吹き替えを、フランスで行うそれに一本化することを考慮中だと発表したのを受けて、モントリオールの観客がパリ風の言葉づかいしか今後は耳にしなくなるだろうということに、記者は驚きの感情を露わにしている。

けれども、記者がこのように絶句したり驚いたりしているという事実の裏に、記述上の技巧的側面があることも看過すべきではない。つまり、正確を期すならば、記者はそうに絶句してみせているのだし、驚いてみせているのだといわなければならない。そして、なぜそうしてみせているのかというと、それ

は、このような形で記者が読者との一種の共謀関係を形成しようとするからであろう。読者に自分の感情を共有させることによって、読者と自分との距離を狭め、そのぶんだけ読者にとって記事内容を身近で魅力的なものにしようとする意図が、発信者である記者の側にはあるわけである。

しかしながら、読者との共謀的接点をつくり出すためのより直接的な方法は、読者に対してじかに言葉を向けるというやり方であろう。それは、発信者の存在を表出する記述態度のうちで最も誇示性の高いものとして、すでに名前を挙げた対話的態度にはかならない：

09) **Autre exemple?** Dans un contentieux récent, à propos de certaines limites imposées par les pouvoirs publics canadiens à la puissante presse magazine américaine, les Etats-Unis menaçaient de réviser à la baisse leurs importations d'acier canadien. (S Q 1)

10) Même si la Zlea, malgré toutes les embûches prévisibles (des réserves du Congrès de Washington aux ambitions concurrentes du Brésil), voit le jour, le mariage canado-américain a encore de beaux jours devant lui. **Si l'on en doute**, il suffit de voir les inquiétudes jalouses suscitées, ici, par l'irruption du Mexique dans ce ménage élargi à trois, pour comprendre qu'à choisir entre la répudiation et l'étreinte jusqu'à l'étouffement, les élites comme l'opinion canadienne ont déjà tranché. (S Q 1)

前者においては、米加両国間の経済的統合がカナダの政治的独立をむしろ脅かしている例として、アメリカのNMD(核ミサイル防衛構想)に対してカナダ側が警戒的な発言をすると、すぐに駐加アメリカ大使が貿易上の報復措置を云々したことを挙げたうえで、さらに自らの論拠を固めるために、記者は「もう1つ別の事例を示しましょうか」とわれわれ読者にじかに言葉を向けている。後者においては、Zlea(南北アメリカ自由貿易圏)が目の目を見ても、米加両国の親密な関係は保たれ続けるだろうと述べたうえで、「もしも読者諸氏がそれを疑うようなら」と、やはり記者の言葉がわれわれ読者にじかに向けられている。いずれの場合も、懐疑的読者をかりに想定し、その読者をも納得させるような姿勢をとってみせることによって、自己の見解の正当性をより強固なものにしようとする。

うという仕掛けである。このような仕掛けの枠内で、読者は記者とじかに向かいあうことになるのだが、ここにおいて、発信者の人格的存在の誇示は究極的な有りようを示しているといえるだろう。

この節の後半では、記事本体において、発信者である記者の存在が誇示される4つのタイプを順に見てきたが、それらのうちでも誇示性の度合いが高い最後の3つ、すなわち、文彩的態度・感情的態度・対話的態度は、論評的なトーンの記事においてより頻繁に表れるもののようである。したがって、日刊紙よりも週刊誌において、日刊紙のなかでは事実を詳述する記事よりも、SN5のように出来事の経過を批評的に物語るといった類いの記事において、それらはより頻出するのだといえる。このように、記事の性質と発信者の誇示性の度合いとは歴然とした相関関係にあるが、さらには個々の紙誌の執筆方針などもまた、記者に許容された誇示性の度合いを左右する要因だということも十分に考えられる。即断はつつしまなければならないが、このような観点から眺めた場合、日本とフランスの間にはそれほど大きな差異はないように思われる。

3. 伝達者

報道的言説における直接話法のプロトタイプ<L'émetteur-journaliste rapporte au récepteur-lecteur : <X dit [dira ; a dit] Y.>>のうち、ここでは伝達者の部分であるXに焦点をあてる。われわれのコーパスにおいては、伝達者の具体的提示のタイプとして以下の4つを挙げることができる。

a) 伝達者が伝達内容の前方に示される場合：

11) En réponse aux manifestants antimondialisation, un salmigondis de professionnels de l'extrême gauche et de simples citoyens armés de bons sentiments, qu'il a qualifiés d'«enfants gâtés», **le président mexicain, Vicente Fox**, affichait un bel optimisme : «Pour la première fois de son histoire, l'Amérique latine a une chance de sortir de la pauvreté.» (S Q 1)

12) A Paris, **le président de la commission des affaires étrangères de**

l'Assemblée nationale, François Loncle (PS), déplore un accord *«au rabais»* qui *«témoigne de l'érosion continue de l'esprit européen et de la montée des égoïsmes nationaux»*. (S N 1)

b) 伝達者が伝達内容の途中に示される場合:

13) *«C'est une bénédiction de vivre auprès d'un marché aussi dynamique, s'enthousiasme Pierre Pettigrew, le ministre du Commerce international. Nous n'avons qu'un seul voisin, mais c'est un remarquable client.»* (S Q 1)

14) Il s'agissait de dire comment se distribuera le pouvoir dans une Europe élargie et, donc, de réformer les règles de fonctionnement d'une Union qui marche déjà mal à quinze membres et va très vite en compter treize de plus. C'était, disait-on, indispensable pour empêcher que l'élargissement ne se fasse aux dépens de l'intégration. (S N 7)

c) 伝達者が伝達内容の後方に示される場合:

15) *«Le XIX^e siècle a été le siècle des Etats-Unis, le XX^e siècle sera celui des Canadiens»*, prédisait en 1896, non sans aplomb, **le Premier ministre de l'époque, Wilfrid Laurier**. (S Q 1)

16) Depuis, l'entourage du président de la Commission explique avec complaisance que la cohabitation est devenue un véritable handicap pour la présidence française: *«Avant que la présidence puisse parler, il faut d'abord qu'elle se mette d'accord avec elle-même»*, explique perfidement **un conseiller de M. Prodi**. (S N 5)

d) 伝達者が示されない場合:

17) Or il y a d'un côté une «culture québécoise» et, de l'autre, la culture d'un Canada anglais qui n'est pas évidente et qui doit se démarquer de la culture américaine. (S Q 3)

18) Pendant au moins une dizaine d'années, chaque Etat membre de l'Union sera représenté par un commissaire au sein de l'exécutif européen. Telle était la volonté des «petits» pays de l'Union. Les «grands» avaient le

souci d'une Commission moins nombreuse, et si possible ne dépassant pas le seuil actuel de 20 membres, afin que son fonctionnement ne soit pas paralysé. (S N 3 ; 17)と18)における下線は吉田による)

a)とb)とc)に挙げた例を一覧すれば明らかなように、伝達者が示される位置としては、伝達内容の前方・途中・後方の3とおりがあがる。言表者がこれらを使い分ける際の選択基準とは、いかなるものなのだろうか。

概略的かつ図式的にいて、言及される発話行為の宣言性(proclamativité)が高いほど伝達者は伝達内容の前方に置かれ、その説明性(explicativité)が高いほど伝達者は伝達内容の後方に置かれる。そして、伝達者が伝達内容の途中に置かれる場合には、伝達者は、前方の内容に対しては説明者の立場にあり、後方の内容に対しては宣言者の立場にある。これは、伝達者がまず明示される場合には、当該の発話行為があたかも1つの事件であるかのように浮き彫りにされる効果がある⁴⁾一方、伝達内容がまず提示される場合には、それは先行する文脈のなんらかの換言または敷衍として読者によって捉えられる、ということと関係があるだろう。ただし、ここでいう「宣言性」と「説明性」は、あくまでも相対的な概念であって、純粋に宣言的または説明的な発話行為なるものは、少なくともわれわれのコーパスにおいては見受けられない。

11)は伝達者前置の場合の宣言性をよく表す例である。グローバリゼーション反対のデモに参加した人々を評して、メキシコ大統領 V. Fox が「甘やかされた子供たち」と批判したのも、同大統領が Zlea(南北アメリカ自由貿易圏)の創設計画を歓迎して、ラテン・アメリカの将来について明るい展望を述べたのも、ケベック・サミットの主要参加メンバーとしてのある種の「宣言」にはかならないし、そういうものとして、この2つの発話行為の事件性はかなり高いといえる。12)の例についても同断であるが、このケースの宣言性または事件性は、これに先行する直前のセンテンスとの文体的コントラストによっても増幅されている。すなわち、《Les résultats de Nice ne suscitent pas l'enthousiasme dans la plupart des capitales européennes, où l'on constate qu'ils sont sensiblement inférieurs aux ambitions affichées.》という直前の地の文では、ほかのEU諸国の政府筋の消極的評価が、曲言法(litote)をまじえて喚

起されているのに対して、12)では、フランス国民議会の外務委員会委員長 F. Loncle の強い非難の言葉が、きわめて直截的に引用されている。

これらに対して、13)において伝達者に前置されている伝達内容《C'est une bénédiction de vivre auprès d'un marché aussi dynamique》は、先行する地の文で、今日のカナダの経済的活力がアメリカとの貿易に依拠している度合の高さが、統計的に説明されているのを受けて、その一種の言いかえとなっている。つまり、伝達者 P. Pettigrew のこの前半部の言は、先行する地の文との大きな継続性ないしは同質性を有している。後半部の言葉である《Nous n'avons qu'un seul voisin, mais c'est un remarquable client》も、実質的意味のうえでは前半部と似通っているが、表現形態の点では両者の間にかんがりの乖離がある。すなわち、後半部の言のほうは、寓喩を用いた逆接等位構文というインパクトの豊かな形態になっており、その結果、宣言性において前半部の言を凌駕している。14)の例でも、指示代名詞 Ce が受けている前方の説明的センテンスと比較すると、実質的意味のうえではそれとかなり重複するものの、《disait-on⁵⁾》の後方の伝達内容は、全体的トーンが簡潔であること、《indispensable pour empêcher que...》という言い回しに「決然性」が込められていること、そして、《l'élargissement》と《l'intégration》という2つの対語が《aux dépens de》という前置詞句を介して対峙的に配置されていることのために、高度の宣言性を具えるにいたっている。

このように、報道記者の文体美学は、伝達者がひとたび示された以上は、その後の引用では宣言性が醸し出され、伝達者がまだ示されていないかぎりには、先行箇所と引用との継続性・同質性が保たれることを追求するもののようである。前者のケースにおいては語り口調をダイナミックにし、後者のケースにおいては地の文から引用への移行を滑らかにするという効果が、それぞれ生まれることになる。そのような文体的工夫が、読者の注意を記事の文章に引きつけておくための一つの手段であることはいうまでもないが、伝達者後置の例である c) の2つのケースを分析することによって、地の文から引用への移行の滑らかさがどのように確保されているかについて、さらに具体的に見てみることにしよう。

まず15)であるが、13)の後半部の言葉と同様に、引用のなかで逆接等位構文が用いられているに加えて、引用全体が整然とした対句構成になっていることから、伝達者後置のこの例における伝達内容は「決然性」の豊かな宣言的発言となっているという、一見したところ、これまでの例と矛盾する事態が出来している。しかし実際には、この例の前後の文脈を考慮すれば、その矛盾は消散することになる。すなわち、前方の文脈では、カナダの人工授精センターが精液不足のためにアメリカの精液バンクに援助を求めたというニュースが、カナダ人たちによっていたって平静に受け止められたことを紹介した後、発信者が揶揄的に《Et tant pis pour la fierté nationale!》と結んでいる。他方、後方の文脈では、先頃のケベック・サミットで Zlea が2005年までに創設されるとの確認がなされ、合衆国の「西半球」における経済的(および政治的)覇権がいよいよ強まる見通しだ、ということが述べられている。つまり、「19世紀は合衆国の世紀だったが、20世紀はカナダの世紀になるだろう」という当時のカナダ首相の発言は、この辺りで展開される主題とは直接的な関係をもたず、むしろ、文化的アイデンティティーや経済的覇権におけるアメリカの優越性を際立たせるための、小さな反証的挿話として用いられているといえる。「アメリカの優越性」という全体的文脈のなかに、それと相反する発言行為が一つの純然たる「宣言」として入りこんできたとしたら、文章の流れがきわめて奇異なものになったことであろう。したがって、伝達内容自体は宣言的であるにもかかわらず、ここでは、その宣言性が伝達者後置の説明性のうちに溶かしこまれた格好になっているのである。

この例などは、伝達者後置の説明性が、かなり広い前後の脈絡を考えに入れないと捉えられないケースだが、次の16)の例は逆に、それが非常に端的につかめるケースだといえる。まず地の文で、フランスが議長国を務めるうえで保革共存は大きな障害になっているという見解を、ヨーロッパ委員会委員長の周囲の者が口にしてしまうと述べられているのを受けて、「議長国(フランス)が発言するに先立っては、そもそも議長国内部に意思の統一がなくてはならない」との引用文が続いているが、この両者の関係は例示のそれにはかならない。継続性や同質性が豊かであり、したがって、地の文から引用への移行はすぐれて

滑らかである。

ここで、以上の6つの例について、伝達者の明示性の度合を見てみよう。純粹に宣言的なa)では2つの例とも、＜肩書＋人名＞という最も明示的な伝達者提示の方法がとられているのに対して、説明性と宣言性がこの順序で生起するb)については、13)で、＜人名＋肩書＞という、かなり明示的ではあるものの、「人名」を後続の「肩書」が形容詞的に説明しているという意味において、宣言的ニュアンスの乏しい提示方法がとられているし、14)においては、誰を意味するのかがかなり不明瞭な不定代名詞 *on* が用いられている。さらに、c)については、伝達内容自体の宣言性に引きずられる格好で、15)で＜肩書＋人名＞という提示方法がふたたびとられているものの、引用部分が先行する地の文の例示となっている16)では、人名をともしない肩書のみ提示形態となっている。すなわち、おおむね伝達者の明示性の度合は、発話行為の宣言性の高さに比例し、その説明性の高さに逆比例しているといえる。14)と15)の間で逆転現象が認められるけれども、それは、14)の例では伝達内容が全体として説明的な言説を構成している一方、15)の例は、説明的性格の前後の脈絡のなかに挿入された、小さな宣言的挿話だということで説明されうる。

残るd)の2つの例は、そもそも伝達者がまったく示されていないケースである。17)に1つの事例が、18)に2つの事例がそれぞれ認められるが、一応これらはいわゆる「距離確保のギュメ」(*guillemets de distanciation*)という範疇にくくり入れることができるだろう。当該語句をギュメで囲むことによって、言表者がそれらの特異性を示唆し、もって地の文とそれらの語句の間に距離を確保しているということは、これらのすべての事例に共通するからである。もっとも、17)の事例と18)のそれとでは、距離確保の目的が正反対となっていることも明らかである。17)では、言表者はそのような距離を設けることで「ケベック文化」という言葉をひとときわ浮き彫りにしている。それに対して、18)では、発信者は「小さな」と「大国」という言葉をギュメで囲むことによって、それらが留保つきで用いられていることを読者に示している。このように、「距離確保のギュメ」には、強調目的と留保目的という2つの異なった用いられ方があるのだ。

しかし、目的の相違にかかわらず、「距離確保のギュメ」もまた、あくまでも直接話法の1つの形態である。17)では、言表者が、自らの言葉を浮き彫りにすることによって、その言葉の伝達者が自分自身にはかならないことを鮮明にしている(伝達者=言表者自身;伝達内容=ギュメで囲まれた言葉)。一方、18)においては、いうまでもなく、世間では常用的にそう言っているというニュアンスが読みとれる⁶⁾(伝達者=世間;伝達内容=ギュメで囲まれた言葉)。翻って考えれば、強調効果や留保効果が発現されうるのも、実は、こうした直接話法性とその前提として厳然と存在しているからだといえるだろう。

4. 伝達動詞

報道的言説における直接話法のプロトタイプ<L'émetteur-journaliste rapporte au récepteur-lecteur : «X dit [dira ; a dit] Y.»>のうち、ここでは伝達動詞の部分である dit [dira ; a dit] に焦点をあてる。われわれのコーパスにおいては、この伝達動詞の具体的使用例は、その性質に基づいて以下の4つのグループに大別できる。

a) 本来的な伝達動詞:

- 19) 《Le XIX^e siècle a été le siècle des Etats-Unis, le XX^e siècle sera celui des Canadiens》, **prédisait** en 1896, non sans aplomb, le Premier ministre de l'époque, Wilfrid Laurier. (S Q 1)
- 20) 《On nous a opposé des vetos insurmontables》, **a déploré** Romano Prodi, accusant ainsi de manière implicite l'attitude de Tony Blair, qui a catégoriquement refusé la moindre concession à propos de la fiscalité et de la politique sociale. (S N 2)

b) 疑似的な伝達動詞:

- 21) 《C'est une bénédiction de vivre auprès d'un marché aussi dynamique, **s'enthousiasme** Pierre Pettigrew, le ministre du Commerce international. Nous n'avons qu'un seul voisin, mais c'est un remarquable client.》(S Q 1)

- 22) Le premier ministre suédois, Göran Persson, qui a qualifié devant quelques journalistes la présidence française d'«*organisation à l'italienne*», se voit **rappeler à l'ordre** par le ministre italien des affaires étrangères, Lamberto Dini, à qui on a obligeamment rapporté la remarque: «*Ces Suédois n'ont de leçon à donner à personne, eux qui bloquent tout!*». (S N 5)

c) 動詞以外の品詞:

- 23) «Il est difficile pour une souris de dormir avec un éléphant»: le **constat** désabusé, jadis établi par l'ancien Premier ministre Pierre Elliot Trudeau, à la recherche infructueuse d'une troisième voie, se vérifie chaque jour davantage avec l'interconnexion des deux économies. (S Q 1)

- 24) L'accord de Nice, qui doit être ratifié par les Parlements nationaux, si possible «*dans les dix-huit mois à venir*» **selon** la présidence française, est toutefois un document inachevé. (S N 1)

d) 伝達語彙素なし:

- 25) Lors du contre-sommet – «sommet des peuples» – les opposants au libre-échange dressaient l'inventaire des «menaces» qui pèsent sur le «modèle canadien», plus attentif aux valeurs collectives et aux services publics, notamment l'éducation et la santé gratuite. (S Q 1)
- 26) L'Allemagne a néanmoins obtenu une série de compensations quant à son poids dans les institutions communautaires: ainsi, la «clause de vérification démographique», qui prévoit que toute décision du conseil devra être prise par des Etats représentant au moins 62% de la population de l'Union, est favorable à l'Allemagne. (S N 3 ; 25) et 26)における下線は吉田による)

まず「本来的な伝達動詞」としてa)に挙げた *prédire* と *déplorer* については、これらは、日常の話し言葉で多用され、純粋に伝達機能をはたす *dire*, *répondre*, *ajouter* などとは一線を画す動詞であるということが注目される。

つまり、なんらかの付随的意味素を含んだ動詞だということであって、*prédire* には「予見性」、*déplorer* には「遺憾性」という意味素がそれぞれ含まれている。そこで、報道的言説においては、含意の乏しい伝達動詞は排除される傾向があるのではないかと考えることができるが、はたして、われわれのコーパスには *dire*, *répondre*, *ajouter* といった純粹伝達動詞の使用例はきわめて少ない⁷⁾。このことは、報道的言説が、日常の話し言葉の平板さに背馳することによって、独自の言語空間を展開する場だということを示していると見なすことができる。にもかかわらず、*prédire* や *déplorer* などの、多少なりとも含意性のある伝達動詞を、「本来的な伝達動詞」としてここでグルーピングできるのは、これらの動詞が <*dire que...*> の統語パターンに書きかえ可能だという理由からである。<*prédire que...*> も <*déplorer que...*> も、辞書に登録されている間接話法の事例にほかならない。

このような間接話法への書きかえが不可能な動詞として b) に挙げたのが、*s'enthousiasmer* と *rappler à l'ordre* である。これらの動詞(句)は、第一義的には心理変化やそれだけで完結した言語行為を意味しており、具体的な文脈が与えられないかぎり、それらだけで伝達機能をはたすことはできない。けれども、本来ならば伝達動詞が占めるはずの場所に置かれると、にわかにそれらが伝達機能を帯びるというのも事実である。これには2つの理由が考えられる。1つは、「感激する」といった心理変化は潜在的に発話行為をともなうものであるし、「叱正する」といった対人行為にいたってはまさに発話の存在を前提とするものだということである。つまり、これらの動詞は多かれ少なかれ意味的に「発話性」を孕んでいるといえる。もう1つの理由は統語的なものである。*s'enthousiasmer* も *rappeler à l'ordre* も、ジェロンディフ化することによって、たやすく *dire* と結合させることができる。すなわち、*dire en s'enthousiasmant* と *dire en rappelant (quelqu'un) à l'ordre* は、ともにごく自然な言い方だということである。このように、意味のおよび統語的理由から、本来は伝達動詞でない動詞が疑似的に伝達機能をはたしている例は、実は報道的言説にあってはかなり多い⁸⁾。これはやはり、そうした手法によって日常の話し言葉の平板さに背馳することができるためであろう。第一義の意味に加え

て「伝達」のニュアンスをもはっきりと出すというこの手法は、筆勢を高揚させるための、けだし効果的なやり方だといえる。

動詞以外の品詞が伝達機能をはたすこともある。23)では名詞が、24)では前置詞がそれぞれ<dire>のニュアンスを表している。名詞が伝達機能を帯びる際には、それは伝達内容と同格に置かれることが常であるように思われるが、23)でも伝達動詞 *constater* の名詞形が、先行する伝達内容と同格に置かれている。実際にはこうした例は比較的まれである⁹⁾けれども、それだけに、統語的バリエーションを創出するという意味では、効果的かつ貴重な手法だといえるであろう。また、これによってb)のグループとも通底する言説の経済性が保障され、さらには、このような同格構文は、<動詞一目的語>といった統語的従属関係に起因する構文上の煩雑さを免れていることから、冗長ではない簡潔な筆勢がそれによって醸成されるという効果もある。こうした効果は、24)の *selon* の使用例にも等しく認められる。かりに *selon* を用いないとすれば、*«la présidence française souhaite que ce soit si possible dans les dix-huit mois à venir»* などの文言を、挿入節として文中に置くことになるだろうが、これでは筆勢が殺がれることはなほだしい。だから、このわずか2音節からなる *selon* によって伝達動詞を節約してしまうやり方は、ある意味では、時事報道文の本質ともいえる言説の経済性を象徴するような究極的な手法だといえよう。

しかしながら、言説の経済性を最もよく保障するやり方は、直接話法の存立を危うくするおそれがあるという代償を承知のうえで、伝達動詞やさらには伝達者を字面のうえから削除してしまうことであろう。25)は、「自由貿易に反対する人々」(*les opposants au libre-échange*)が使っている言葉や言い回しを、ギョメで囲んで引用している例である。これらは完全な伝達内容とはいえないまでも、少なくともその断片だとは見なせるであろう。けれども、ここにはいかなる伝達動詞も使われていない。いうまでもなく、これは、引用がすべて名詞(句)だということ、そして、それらの引用が地の文に点括的にちりばめられているということと関係がある。しかし、伝達者(*les opposants au libre-échange*)が明記されているので、その伝達者とこれらの引用との間には、直

接話法の関係が比較的是っきりと捕捉されうる。このことは、たとえば S Q 2 の見出しである《Christopher Sands: “Une peur exagérée”》の場合にもあてはまる。つまり、伝達者と伝達内容が字面のうえで隣接していれば、その隣接関係そのものが伝達動詞の役割をはたすということである。

それに対して、26)においては、引用の近辺でいかなる伝達者への言及もなされていない。したがって、これはもはや直接話法の事例とはいえないかのように一見すると思われるかもしれない。しかし、この引用を含むセンテンスがニース協定の説明の一部であるという全体的文脈によって、伝達者がこの協定を取りかわした各国行政府の責任者にほかならないということは、歴然としているのである。つまり、この例では、文脈によって指示されている伝達者とその伝達内容との間に、直接話法の関係が打ち立てられている。なるほど、この例などは、いわゆる「距離確保のギュメ」(guillemets de distanciation)にかぎりなく近いとも見なせるだろう。けれども、見方を逆にして、「距離確保のギュメ」というものの自体が、突きつめていけば、直接話法の特殊な一形態にほかならないと判断できる十分な根拠があることは、前節で見たとおりである。

このように、直接話法における伝達動詞の用いられ方という視点は、時事報道文の特質に深くかかわっている。動詞が用いられる場合には、記者は純粋な伝達機能をそれにはたさせるだけでは満足しない。付随的ニュアンスを持たせたり、＜伝達＞以外の本来の意味を発現させたりして、日常の話し言葉の平板さに背馳することを指向する。それはいわば、言葉のうちに意味の厚みを醸し出そうとする傾向である。同時にそれは、言説の経済性と筆勢の豊かさを追求しようとする傾向でもある。この後者の傾向は、動詞以外の品詞が伝達機能を帯びたり、伝達機能をはたすいかなる語彙素も用いられない場合において、とくに顕著に見てとれる。

5. 伝達内容

報道的言説における直接話法のプロトタイプ <L'émetteur-journaliste rapporte au récepteur-lecteur: «X dit [dira; a dit] Y.»>のうち、ここでは伝達

内容の部分である Y に焦点をあてる。われわれのコーパスにおいては、伝達内容の具体的提示のタイプとして以下の 2 つを挙げることができる。

a) 点括的に提示された伝達内容:

- 27) La **《destinée manifeste》** revendiquée au XIX^e siècle par la doctrine Monroe visant à consolider l'hégémonie de Washington sur l'**《hémisphère》** sera enfin pleinement vérifiée. (S Q 1)
- 28) **《On nous a opposé des vetos insurmontables》**, a déploré Romano Prodi, accusant ainsi de manière implicite l'attitude de Tony Blair, qui a catégoriquement refusé la moindre concession à propos de la fiscalité et de la politique sociale. (S N 2)

b) 連続的に提示された伝達内容:

- 29) L'Allemagne **《a fait en sorte d'éviter le conflit avec la France》** au sommet européen de Nice, en renonçant notamment à un décrochage en sa faveur dans la repondération des voix au conseil des ministres européens, a affirmé, lundi matin 11 décembre, le chancelier Gerhard Schröder. Un conflit aurait **《ébranlé la relation franco-allemande d'une façon que nous ne pouvons souhaiter》**, a ajouté le chef du gouvernement au cours d'une conférence de presse donnée à l'issue des quatre jours de négociations laborieuses. **《Nous aurions aimé obtenir davantage》**, a souligné le chancelier, par exemple sur la limitation de la taille de la Commission et dans les domaines de décision où l'unanimité continuera de prévaloir. Mais **《nous avons atteint notre but essentiel. Nous avons rendu l'Europe capable d'accueillir de nouveaux membres, (...) les conditions sont enfin prêtes pour réunir l'ouest et l'est de l'Europe》**, a affirmé Gerhard Schröder. (S N 2)
- 30) **《Le Canada n'a jamais été aussi à l'aise dans ce qu'il est, une mosaïque de petites cultures s'épanouissant dans une fédération extrêmement décentralisée, qu'aujourd'hui》**, estime Philippe Faucher, professeur de sciences politiques à l'université de Montréal. **《Le Canada**

existera-t-il encore dans vingt ans? Je n'en sais rien, même si je pense que le problème n'est pas tant de savoir s'il disparaîtra mais quand », avoue de son côté, un brillant ancien « sous-ministre », c'est-à-dire un haut fonctionnaire, d'Ottawa. **« Rien n'empêche demain les entreprises américaines de faire main basse sur les entreprises canadiennes »**, estime Sylvia Ostry, chercheuse au Centre des études internationales de l'université de Toronto et ancienne ambassadrice pour les négociations commerciales multilatérales. **« Avec notre dollar aussi faible, c'est un sérieux sujet de préoccupation »**, reconnaît Jacques Lamarre, président et chef de la direction du grand groupe québécois SNC-Lavalin. **« De 1999 à 2000, les investisseurs étrangers ont doublé leurs achats d'entreprises canadiennes »**, avance Duncun Cameron, professeur de sciences politiques à l'université d'Ottawa. **Nous assistons à une forme de recolonisation par les groupes et l'Etat américains qui orchestrent ce projet. »** **« Bien sûr, nous avons peur de perdre notre souveraineté »**, relance Sylvia Ostry. **Mais quelle est l'alternative?»** (S Q 1)

まず、a) の2つの例を見れば、直接話法における伝達内容の提示の仕方が、いかに柔軟性に富むものであるかがわかる。単一の語や、複数の語が結びついてできる様々な句、そして完全な節にいたるまで、直接話法において引用される言葉の統語レベルは変幻自在の観がある。このなかでプロトタイプにいちばん近く、したがって、読者によって直接話法として最もよく知覚されうるのは、完全な節が引用されている28)のようなケースである。これは、伝達者と伝達動詞が原則として必ず明記されるということのほかにも、発話性が少しも損なわれないのは、完全な節が引用される場合のみであるということに起因する。

このことは、いいかえれば、節の断片しか引用されないと、それだけ発話性が損なわれるということであるが、それと同時に、その断片が地の文に埋めこまれる結果として、発話という文脈が不鮮明になってしまうことにも関係がある。とりわけ27)に現れている2つの事例は名詞および名詞句のそれであるので、単なる「距離確保のギュメ」が使用されているケースだとして、それらの

話法性までもが看過されるおそれがある。しかし、すでに触れたように、「距離確保のギュメ」なるものも結局は直接話法の特殊な一形態であると見なしうる十分な根拠があるし、また、27)の2つの例では、それらの近辺に伝達者ははっきりと記されているのである。すなわち、『la doctrine Monroe』、より正確にはこの宣言を行った合衆国第5代大統領 James Monroe がそれであって、当該の言葉が、この大統領によって用いられた2つのキーワードにはかならないことは歴然としている。したがって、そこでは、発話性は多かれ少なかれ不鮮明になっているものの、直接話法性のほうは十分に保障されているといえる。

ところで、27)や28)のように、直接話法が点括的に用いられる場合の文体効果とはどのようなものであろうか。比喩的にいえば、それはスローガンの効果であるように思われる。「乗り越えがたい拒否権がわれわれに対して発動された」との Romano Prodi の言は、ヨーロッパ委員会を代表してのコメントであるが、これは、当該委員会の委員長として遺憾の意を表した一種のスローガンだと見なすことができよう。また、「明白な運命」と「西半球」はモンロー・ドクトリンのキーワードであるが、いずれも合衆国の立場を擁護するためのスローガンという色彩を強く帯びているのはいうまでもない。もっとも、後者の2つの事例は、直接話法が連続的に用いられたケースだという側面も合わせもっている。すなわち、これら2つは同格関係で結びついて「西半球という明白な運命」の意を表し、もってモンロー・ドクトリンそのものの1つの定義づけとなっていると見なせるし、あるいはまた、「明白な運命」はモンロー主義の政治・経済的側面に、「西半球」はその地政学的側面にそれぞれ異なった観点から光をあてているとも見なせる。直接話法が連続的に提示される場合の2つの代表的な連関様式は、＜換言＞と＜対比＞の関係だと考えられるが、それらの関係がここに最小限の形をとって表れているといえるだろう。

伝達内容が点括的に用いられるとスローガンの文体効果が生まれるのに対して、それが連続的に用いられると、これも比喩的な言い方だが、そこにはマニフェスト的文体効果が発現されてくる。これは27)においてすでに察知されることであるが、29)のように発話性を十全に具えた4つもの直接話法が連続する事例においては、その効果が如実に感得されうる。ここの直接話法は、いず

れもニース・サミットの成果を総括したドイツ首相の言であるが、その内部連関は、最初の3つの引用がたがいに＜換言＞の関係にあるのに対して、最後の引用がそれらと＜対比＞の関係にあるというものである。すなわち、「フランスとの軋轢を避けた」という消極的評価が続いた後に、結びで、「それにもかかわらず東欧諸国のEU加盟への条件は整った」との積極的評価が示されている。個々の直接話法はそれぞれ一種のスローガンにすぎないけれども、それらが連続すると、にわかに内部連関という作用が働き出し、その結果、一種のマニフェストができあがるということがここでも確認される。

このように見てくると、27)や29)における直接話法の連続使用とSN2・SN3・SN4のようなインタビュー記事とでは、文体効果の点でどういった差異があるのか、という疑問が浮かんでくる。インタビュー記事もまさしく同一伝達者をめぐる直接話法の連続にはかならないし、SN2・SN3・SN4のそれぞれには、はたしてマニフェスト的な気味がいくぶん漂っているというのも事実だからである。けれども、インタビューにおける被取材者は「マニフェスト的発話者」であると同様に、あるいはそれ以上に、「熟慮的発話者(communicant délibératif)」であるという動かしがたい事実が存在する。つまり、被取材者は取材者の質問に反射的に答えるだけでなく、自分自身との内面的対話を行いながら言説を展開するという側面を合わせもっている。そのため、インタビュー記事での被取材者の言葉には、独話(soliloque)という性質が色濃くにじみ出る結果となる。形式はある程度までたがいに似ているものの、地の文で直接話法が連続的に使用される場合と、インタビュー記事で被取材者の言葉が続く場合との間には、本質的なところでそのような大きな乖離があるのだ。

とりわけ、29)の事例では、ニース・サミットでの交渉のテクニカルな内容が、ギュメのなかに含められていないことに注目すべきである。ドイツ首相が共同記者会見でそれにも触れたであろうことは確実であるにもかかわらず、発信者は意図的にそれをギュメの外に置いている。その理由は、テクニカルな内容というものがマニフェスト的文体効果を殺いでしまうからにかならないであろう。あるいはまた、記者会見なのであるから、それをインタビュー形式に仕立てることもできたはずであるが、それでは熟慮的独話性がにじみ出てしまっ

たであろう。外向的マニフェスト性と内向的熟慮性とは、一方が立てば他方は立たないという相反する2つの傾向である。ここでの発信者は、前者の文体効果を選ぶことに決めた以上、テクニカルな内容を地の文に移しかえてまでも、その効果を執拗に追求しているのだといえる。

ところで、同一の伝達者の言葉が連続して引用されるケース以外に、ある特定の社会集団に属する複数の伝達者の言葉が連続的に列挙される場合においても、マニフェストの文体効果が醸成されることがある。30)の例では、5人のカナダ有識者による合計6つの伝達内容が、記者の論評ぬきで連ねられているが、全体として、主権国家カナダの存続という統一テーマをめぐるマニフェストの観を呈している。すでに政治・文化面においてカナダが国民国家としてのまとまりを著しく欠いており、経済面でも合衆国からの圧力が日増しに強まっているという状況のなかで、結局は合衆国との統合もやむなしとの見解を多かれ少なかれ共有する、大学人および政財界人の諦念的な「マニフェスト」である。

単なる「スローガン」ではない以上、そこでの伝達内容どうしの間にも内部連関があるはずであるが、この場合の連関様態はやや複雑である。まず、Ph. Faucherの文化・政治に関する楽観的見解が挙げられた後に、元行政官の政治に関する悲観的見解がのせられ、その後にS. Ostry、J. Lamarre、D. Cameronのいずれも経済に関する悲観的見解が続くのだが、最後のD. Cameronは発話の後半部で政治にまでその悲観論を拡大させていて、それを受ける形で、最後にふたたびS. Ostryの今度は政治に関する悲観的見解が挙げられている。つまりここには、楽観的見解—悲観的見解、および、文化—政治—経済という2つのファクターが同時に介在している。その結果、前者については<対比>という単純な関係、後者については<換言かつ対比>→<対比>→2つの<換言>→<対比>→<換言>という変化にとんだ関係がそれぞれ結ばれ、全体を通じてこれらの2つの関係が重なりあった格好になっている。29)と比べれば、ここでの「マニフェスト」の内部連関はけだし複合的である。

内部連関がこのように複合的であるに加えて、伝達者がモントリオール、オタワ、トロントなどカナダ各地の在住者であること、伝達動詞として順に

《estime》・《avoue de son côté》・《estime》・《reconnaît》・《avance》・《relance》が用いられている点に、記者の側の演出的意図が読みとれること、さらには、D. Cameron の言とそれに続く S. Ostry の言の間にいたっては、そこにいかなる地の文も挟みこまれていないことは、この30)の事例に対して、マニフェストの文体効果のほかに、それと並行する別のある文体効果を付与している。それは、討論会(colloque)を視聴しているような錯覚をわれわれ読者に与える効果である。もちろん、外国の一週刊誌のためにこれだけの人々が一堂に会して討論しあったとは考えられず、これはあくまでも、個別に取材したものを記者が仮構的に討論会ふう紙上に仕立て上げたものであろう。直接話法を連続させることによって、討論的ないしは対談的文体効果を生み出すというのは、実は、*L'Express* 誌ではかなり常套的な手段であるらしい¹⁰⁾。

個々の伝達内容の提示の仕方に認められる統語的柔軟性についてはすでに触れたが、伝達内容が連続的に提示される際のバリエーションの豊かさも、それに引けをとらないといえる。しかも、伝達内容は点括的に提示される。そのような形態上の豊饒さを活用して、記者はさまざまな文体効果を創出する。点括的に提示されれば、伝達内容はスローガン性を帯びるし、連続的に提示されればマニフェスト性や討論性がそこに醸成される。あるいは、インタビュー記事の形で提示されれば熟慮的独話性が色濃くにじみ出てくる。つまるところ、これらの文体効果のバリエーションは、人間の言語行為にともなう心理や状況の種々相に対応するものである。ある人物の言葉を引用するという純粹に言語学的行為にとどまらないで、それを超越したところで、報道記者は、複雑な現実の諸相を直接話法というスクリーンに映し出そうとするものなのであろう。

ところで、*L'Express* 誌と *Le Monde* 紙との間には、直接話法における伝達内容の取り扱い方の点で大きな相違がある。すなわち、前者は伝達内容をそっくりそのままの形で提示しようとする傾向が強いのに対して、後者はそれを地の文の脈絡のなかに埋めこもうとする傾向が強い。そのことは、上掲の29)と30)の2つの例を比較してもすでに歴然としているが、その結果として、*Le Monde* 紙においては、直接話法と間接話法との混交体という、話法形態のうえで興味深いケースが認められることがある。29)のなかに見受けられる事例

のほかにも、われわれのコーパスのなかでは、さらに次の3つの例を指摘することができる：

- 31) Le chancelier Gerhard Schröder a **déclaré** à l'issue du sommet **que l'Allemagne «avait fait en sorte d'éviter un conflit avec la France» au cours de la négociation.** (S N 1)
- 32) A Paris, le président de la commission des affaires étrangères de l'Assemblée nationale, François Loncle (PS), **déplore un accord «au rabais» qui «témoigne de l'érosion continue de l'esprit européen et de la montée des égoïsmes nationaux».** (S N 1)
- 33) L'Elysée dément avec force et un ministre belge **affirme** publiquement **qu'il a trouvé «Jacques Chirac en pleine forme».** (S N 5)

これらの3つの例のいずれもが、純粋な直接話法に容易に書きかえられうるにもかかわらず、なぜ *Le Monde* 紙の記者は、見方によっては手の込みすぎたこうした記述法をとろうとするのだろうか。一つには、引用に際してのデリカシーがそうさせるのだといえる。そのことの端的な表れは、*Le Monde* 紙では、引用のギュメのなかの言葉が、原則としてシステムチックにイタリック体で印字されているのに対して、留保を目的とする「距離確保のギュメ」のなかの言葉は、逆にイタリック体で印字されていないという事実において認められる：

- 34) Telle était la volonté des **«petits»** pays de l'Union. Les **«grands»** avaient le souci d'une Commission moins nombreuse, et si possible ne dépassant pas le seuil actuel de 20 membres, afin que son fonctionnement ne soit pas paralysé. (S N 3)
- 35) La Belgique et le Portugal, qui mènent maintenant la fronde des **«petits pays»**, parlent de quitter le sommet, avant de se raviser. (S N 5)
- 36) Dans les briefings **«off»** organisés dans les grands hôtels de Nice, Jacques Chirac n'a pas été épargné par les rumeurs. (S N 5)
- 37) L'Union avance sur des sujets très **«intégrateurs»**, comme la monnaie,

la défense, le droit des sociétés, sans se donner les moyens institutionnels nécessaires à la gestion de ces approfondissements. (S N 7)

これらの例はいずれも、「世間でいうところの」という含みをもたせるためのギュメの使い方であって、同じく単一の語をギュメで囲んではいるものの、明らかにすぐれて状況的なニュアンスをもたせた使い方である次の例などとは、はっきりと一線を画すものである：

- 38) Le samedi soir, la France appelle encore ses partenaires à faire de nouveaux *«sacrifices»* pour qu'un accord *«ambitieux»* soit enfin signé.
(S N 5)

このようなデリケートで厳密な記述態度が、上述のような「直接・間接混交話法」をも生み出すにいったと見る事が可能である。なぜなら、伝達者の言葉は、引用の長さが短ければ短いほど忠実に報告されうるということは、われわれの誰もが常日頃から経験していることであって、したがって、引用の正確さを期すためには、それをできるだけ簡潔な形で提示するように心がけるべきだからである。

しかしながら、そこにはもう一つ別のファクターも介在していると考えることができる。すなわち、すでに述べたように、*L'Express* 誌の記者とは対照的に、*Le Monde* 紙の記者は、直接話法の伝達内容を自らの地の文の脈絡に取りこもうとする意欲が強い、という傾向がそれである：

- 39) Lionel Jospin a semblé en prendre la mesure, en indiquant : *«l'après-Nice est d'une autre nature. Il faut aborder ce sujet avec une parfaite disponibilité intellectuelle, mais se montrer réaliste et prudent sur ce que l'on pourra faire»*. (S N 2)
- 40) Car la Belgique, notamment, refuse farouchement de disposer de moins de voix que les Pays-Bas au conseil européen. Et insiste maintenant avec provocation : *«si la France considère que la démographie légitime un décrochage, qu'elle donne l'exemple»*, en offrant à l'Allemagne un poids supérieur au sien. (S N 5)

これらは同種の例の一部にすぎないが、39)も40)も、引用されたセンテンスが

小文字で始められている。39)の例にいたっては、後続のセンテンスが大文字で始まっているにもかかわらず、そうなのであり、さらに、最後のピリオドがギュメの外に打たれてもいる。一方、40)では、引用部分と意味的にも統語的にも深くかかわる地の言葉が、その直後に配置されている。*Le Monde* 紙における伝達内容の提示形態が常にこういったふうだというわけではないが、同様の提示方法がその記事の随所でとられているのは事実である。直接話法を地の文のなかに埋めこんでしまおうとするこの種の傾向は、あえていえば、今度は被引用者に対するデリカシーのなさの表れだと見なされえよう。なぜなら、被引用者の誰も、どのような形であろうとも、引用される自分の言葉が卑小化されたり一部削除されたりすることを、望んではないはずだからである。

もっとも、*Le Monde* 紙において引用箇所がイタリック体で印字されていることは、そのことを十分に償いうるものだという見方もできるかもしれない。いずれにせよ、*L'Express* 誌のようなシンプルな表記法を好むか、*Le Monde* 紙のようなソフィスティケートされた表記法を好むかは、読者それぞれの嗜好にかかっているといえるだろう。

6. おわりに

主として言語学的観点・文体論的観点・修辞学的観点から、われわれのコーパスにおいて認められる直接話法の諸問題を以上で検討してきたわけだが、もちろん、資料体に基づく記述分析というものがけっして免れえない、コーパスの限定性という壁が残るのはいかんともしがたい。しかし、直接話法にかかわる諸問題の重要な部分は、本稿のなかに網羅できたのではないかと思料される。

とりわけ、<L'émetteur-journaliste rapporte au récepteur-lecteur : «X dit [dira ; a dit] Y»> というプロトタイプを設定することによって、直接話法というテーマに大きな視野からアプローチすることができたのは、この論考での小さくない成果であった。それにより、「発信者である記者」をめぐる、記事本体と付随的構成要素との関係について考察できたし、あるいはまた、記事

本体において記者が自分を誇示するさまざまな例に触れることもできた。さらに、後者の点と関連して、「受信者である読者」についても、限定的ながら言及できたのはよかったと思われる。もっとも、論考のなかでも述べたように、発信者について語ることはそのまま受信者について語ることに通じるわけであり、少なくとも観念的意味における読者については、本稿の全体を通してその様相が十分に示されえたといつてよいだろう。一方、紙誌の購買者という現実の読者にはほとんど触れる機会がなかったが、そのような社会言語学的な考察は他日に譲ることにしよう。

そのほか、「伝達者」、「伝達動詞」、「伝達内容」のそれぞれについては、形態の種々相とその背後に存在する決定要因を明らかにすることにわれわれは意を注いだ。いうまでもなく、その試みは時事報道文という枠内にとどまったわけであり、そういう意味で、言説類型論(*typologie des discours*)の全体という広い視座から見た場合に、本稿でえられた成果は局限的なものにすぎない。たとえば、伝達動詞の用いられ方に関しては、それを小説などの文学的言説の場合と比較してみるなどが、興味深い検討課題として残っている。しかしながら、問題の全容を解き明かす端緒として、その一部の検討から始めることは、それなりに有益なことだということも動かしがたい事実である。

いずれにせよ、本稿での論考の対象とされた直接話法を含めて、話法という側面が言説類型論をささえる重要な柱の1つだということは疑いを容れない。

注

- 1) 直接話法と間接話法の両方を分析したわれわれの論考については、「大阪経済法科大学論集第72号」(1998年11月)に所収の「フランス語報道文における話法の様態—『レクスプレス』誌の特集記事をめぐって—」を参照。
- 2) 1998年現在での *L'Express* 誌の発行部数は54.8万部であり、ほかに国際版として3.8万部が購買されている。同年の *Le Monde* 紙の発行部数は38.9万部であり、そのうちの12.4%はフランス国外で購買されている。
- 3) 1968-1979年と1980-1984年にカナダの首相を務めた。
- 4) 伝達者前置によって発話行為を1つの事件のように提示する例として、おそらく最も華々しい形態は、われわれのコーパスではS Q 2～4の見出しにおいて認められる：

- Christopher Sands : «Une peur exagérée» (S Q 2)
- Marie Malavoy : «Former un foyer de résistance commun» (S Q 3)
- Pascal Lamy : «Misons sur le multilatéral» (S Q 4)

これらの伝達者が *L'Express* 誌の一般の読者に馴染みの薄い人々であることは、簡単な人物紹介が各リードのなかでなされていることから窺えるが、それにもかかわらず、このような提示形態は、これらの発話行為の「事件性」を強調する結果になっている。

- 5) この《disait-on》については、これは慣用句であって、したがって、ここでの on には「伝達者」としての十全な機能を認めることができないと考える向きもあるだろう。しかしながら、ここの前後を《On disait que c'était [...]》とか、《C'était, comme on disait, [...]》とかの言い回しに容易に書きかえることができる以上、ここでの on にも「伝達者」としての機能を認めることは十分に可能である。
- 6) 因みに *Le Monde* 紙では、このような場合にかぎって、ギュメのなかの語句がイタリック体で印字されていない。詳しくは本稿第5節を参照されたい。
- 7) われわれのコーパスには、本稿第5節で触れる「直接・間接混交話法」で用いられているものも含めて、直接話法で使用されている伝達動詞は延べ数で61あるが、純粹伝達動詞の使用は7例を数えるのみである。その内訳は、ajouter が1回、dire が3回、rappeler が1回、répéter が2回である。このうち、dire については、3つの事例のどれも、<dire : (...)> という典型的パターンでは用いられていないことが注目される。すなわち、そのなかの2つは、それぞれ《comme vous dites》、《disait-on》という、ほかの伝達動詞と代替できる可能性が低い言い回しで dire が使われているものであり、また、前者の事例は直接話法の伝達内容のなかで用いられているのであって、発信者に帰せられるべきではない。残る1つは、《[...] Hubert Védrine et Pierre Moscovici, visiblement épuisés, viennent dire quelques mots. "On discute, on avance, y a pas de blocage [...]》という形で使われているものであり、ここでは《dire quelques mots》という連辞全体が伝達内容を導入している。さらに、2回の répéter も、「繰り返していう」という典型的意味において十全に用いられているのではなく、1回は伝達者以外の人々の心理状態を喚起するための(《Jacques Chirac et Lionel Jospin l'avaient répété à satiété : "mieux vaut pas d'accord qu'un accord au rabais" ...》)、もう1回は伝達者自身の心理状態を喚起するための(《"On discute, on avance, y a pas de blocage - pas de blocage - on discute - y a pas de blocage..." , répète mécaniquement le ministre des affaires étrangères, avant de soupirer, [...]》)、それぞれ便宜的な使われ方がなされているのである。
- 8) われわれのコーパスにおいて直接話法で使用されている伝達動詞のうちでは、61の

延べ数のなかの9つ(15%)が、このような疑似的伝達動詞である。重複を除いた実数でいえば、これは43の事例のうちの21%にあたる。

9) 本稿のコーパスのなかでは、同様の事例はほかに3つが見受けられるのみである。

上掲の11)の例における《[...] le président mexicain, Vicente Fox, affichait un bel optimisme : "Pour la première fois de son histoire, l'Amérique latine a une chance de sortir de la pauvreté."》も、そのうちの1つであるが、この事例の場合は、《bel optimisme》と後続の伝達内容とが同格の関係になっているという解釈も可能だが、《affichait un bel optimisme》という連辞全体が、後続の伝達内容を導く1つの伝達動詞句の働きをしていると見なすこともできる。

10) 対談的文体効果については、前掲論文の pp.60-61を参照されたい。

主要参考文献

- DUCROT (Oswald), SCHAEFFER (Jean-Marie), *Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Seuil, 1995.
- FONTANIER (Pierre), *Les figures du discours*, Flammarion, 1977.
- FRÉMY (Dominique), FRÉMY (Michèle), *Quid 2001*, Robert Laffont, 2000.
- GENETTE (Gérard), *Figures III*, Seuil, 1972.
- REY (Alain), *Le petit Robert dictionnaire universel des noms propres*, Dictionnaires le Robert, 1994.
- REY-DEBOVE (Josette), REY (Alain), *Le nouveau petit Robert dictionnaire de la langue française*, Dictionnaires le Robert, 1993.
- 大賀正喜他編, 「小学館ロベール仏和大辞典」, 小学館, 1988.
- 田村毅他編, 「旺文社ロワイヤル仏和中辞典」, 旺文社, 1985.
- 新倉俊一他編, 「事典 現代のフランス—増補版—」, 大修館書店, 1997.
- 野内良三, 「レトリックと認識」, 日本放送出版協会, 2000.
- 吉田廣, 「フランス語報道文における話法の様態—『レクスプレス』誌の特集記事をめぐる—」, 大阪経済法科大学論集第72号, 1998.

本稿は、大阪経済法科大学2000-2001年度研究補助金を受給しての研究成果である。